A Fait Accompli

「なんだ、コレ？」
奥村燐が配られた冊子をペラペラと振ってみせる。
「まんまだよ」
霧隠シュラはにやりと笑って、よく読め、と表紙を目の前に突きつけた。そこには『任務シミュレーション』と銘打ってある。
「し…、しゅ、シュミレーション？」
「シミュレーションな。要するに模擬戦だよ、模擬戦♪」
模擬戦て書けよ、とぶつくさ文句を言う燐を余所に、シュラはひどく上機嫌だ。
「これって…」
ぱらぱらとめくって中身を読んだ神木出雲が、顔をしかめて呻く。
「相手は先生方ですか？」
「うわ。かなうワケあれへんやないですか」
三輪子猫丸の確かめるような問いかけに、廉造が嫌そうな顔をする。その傍らで、勝呂竜士が冊子を斜め読みして期待に満ちた顔をしていた。
シュラはそんな様々の反応を見て、更に笑みを深くする。
「んじゃ、雪男」
「は？」
教室の端に座って、同じように冊子をぱらぱらと捲っていた雪男が、鋭い視線を向けてくる。
「後は説明してちょ♪」
「…仕事しろよ…」
マジで。唸るような不機嫌な声が聞こえてくるが、無視してさっさと教卓の上にあぐらをかいて座り込む。なんだかんだ文句を言うワリには、最終的にはやるのだ。この超マジメ少年は。
雪男はものすごくイヤそうな顔で一つ溜め息をつくと、イスから立ち上がってしわぶきをする。
「…このシミュレーションは、悪魔に対する組織戦を想定しています。皆さんは学年ごとに『祓魔隊』を組んで、悪魔役の我々講師陣を決められた時間内にどれだけ多く倒せたかを競っていただきます」
不機嫌ながらも、講師らしく簡潔な説明をする。
「このメンツで隊を組むんですか？」
神木出雲が挙手しながら尋ねる。その顔にはアリアリと『イヤだ』と言う思いが表れている。
「祓魔師は一人で任務をこなすことはないし、好きな奴とばっかり組めるとは限らないからにゃ」
不満そうな顔をして出雲が黙り込む。そうワガママばかり言ってられない、と言うのはよく判っているのだろう。

『こいつ嫌い』、『誰々とは合わない』、『あの人は苦手』と言う意識は、任務の遂行を驚くほど簡単に妨げる。ですから、と雪男が言葉を続けた。

「むしろ、私情を交えずに冷静になれるようになってください」

雪男の言葉にシュラがニャヒヒ、と笑う。その声を聞いて、メガネの少年が『オマエなんて大嫌いだ』と言うオーラを立ち昇らせながら、嘘くさいほど朗らかに微笑む。

「嫌いな人とでも、経験を積んでいけばある程度一緒に任務をこなすことができますよ。……僕とこの人のようにね」

「オメー、上司にイイ態度だな」

「自分の仕事もマトモに出来ない人に言われたくありません」

少年の殺気にも似た嫌悪の念が、針で刺すようにちくちくとするのがおかしくて、くつくつと笑う。雪男が苦々しげな表情を浮かべた。

嫌いな人ともある程度やっていける、と言う言葉とは裏腹な雪男の苛立ちぶりに、出雲がやや疑わしげな顔をする。

「悪魔役はマジでボッコにしていーのか？」

燐が降魔剣を入れた刀袋をぱしぱしと叩く。ワクワクしている様子でありながら、不安げな表情もしている。途端に、ふっと雪男の不機嫌な雰囲気が急に掻き消える。取って代わったのは、心配で苛立ったような雰囲気だ。

「『マジでボッコ』にして良いワケないだろ」

雪男が溜め息を吐く。先生方なんだぞ？と言う口調がくすぐったくて、笑いそうになる。ホント心配性な親みたいだな。絶対ハゲるぞ。

「特殊な場で行うとは言え、一応シミュレーションですから特別に調整した武器を使います」

「俺の錫杖（キリク）はどないなります？」

志摩廉造が手を挙げる。

「あー、へーキ、へーキ♪奥村の剣も使いたきゃ使え」

シュラがあっけらかんと言う。

「ちょっと、シュラさん」

この行事―メフィストはなんか楽しそうなイベントみたいな顔をしているが、一応塾全体の行事と呼んでおくべきだろう―の話が出てから、講師陣での打ち合わせには必ず『倶利伽羅』をどう対処するか、と言う議題が持ち出されていた。そのまま使わせることに難色を示す講師が多かったが、雪男はその中でも強固に反対を唱えていた。兄が自身の力を安易に使うのをよしとしていなかったからだ。結局今日までも、そして恐らく当日まで結論は出ないだろう。

「心配すんな、ビビリ♪あの中じゃ、大したことねーよ」

ま、何とかなんだろ。にやっと笑ってみせる。雪男は喚き散らしたいのを堪えているような顔をしていた。

その翌日。

塾の講義が終わった教室で、模擬戦―シミュレーションを毎度言い損なう燐の強固な主張で、同学年の彼らは『模擬戦』と言わせられていた―が行われる場所の地図、装備品の一覧を手に、塾生達が頭を寄せ合っていた。そこへは特別な鍵で行くらしい。『特殊な場』と言うだけあって、現実のどこぞではないのかも知れない。

冊子と一緒に配られた地図は等高線が描かれた白地図だったが、誰かが手書きしたものをコピーしたような感じだ。それに拠れば、範囲は半径五キロメートル程、ほぼ円形の森だった。円の中心には『学校』と書かれた敷地がある。北には講師陣の拠点、西が燐たち一年生の拠点、東、南がそれぞれ二年、三年生の拠点だと図示されていた。

それぞれの拠点がスタート地点となり、森の中と学校の建物内にいる悪魔役の講師達を倒していく。

連休となる週末の二泊三日で行われ、二日間合計でどれだけの点数が稼げたかを競う。

「ルールでは、各学年の拠点とセンセ方の拠点は、手出し出来ん」

勝呂の説明に燐が不思議そうな顔をした。

「他の学年の奴らなんて居たっけ？」

「今更やな。任務で散々顔合わせとるやろ」

「他の学年には学生以外の方も居てはりますし、見覚えないんも仕方あれへんけど…」

子猫丸が苦笑いするのに、燐はそうだったっけ？とますます首を傾げる。

『他の学年の奴ら、手強いぞ』

「向こうの方が経験値がある分、有利ってことやな」

宝の人形がパクパクと語ったのに、勝呂が気合いを入れるように手のひらに拳をぶつける。

「言うても、センセ倒せばええのですやろ？」

勝呂の勢いに励まされたような廉造の言葉に燐も、簡単だ、と相槌を打つ。悪魔役を勤める講師たちについてそれぞれ属性とどの程度の級（クラス）の悪魔に該当するのか、と言う情報を載せた一覧が配られている。例えばシュラなどは中級悪魔とされた講師たちの中でも、ずば抜けて強い。

「なに、お気楽なこと言ってんのよ。あたしたちも襲われるってことよ」

「ホントだ。悪魔に襲われた場合は、適切な対処を行うこと、ってルールに書いてあるよ」

杜山しえみが冊子をめくる。

「うあー、なんだよ、コレ。細かいし意味わかんねーで頭煮えるっての」

冊子の後ろに細かい字で続く文章に、燐が早速音を上げた。

「あほぅ、これ違反したら減点や。大した量でもあれへんやろ。センセにでも協力してもろうて、ちゃんと覚えてきぃや」

勝呂が厳しい目つきで睨む。その視線を受けた燐は、とたんに苛